

## 第 5 節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解

## c 移動民

【P261,後 7 行目～P264,1 行目】

次に農村出身者の工業従事者を見てみる。

彼らは、仕事があるときに雇われ、資本の都合により、あちこちを移動して働かされる。仕事がないときは野営して過ごす。

移動労働は、様々な仕事をさせられる。また、彼らは、移動先で疾病の伝染者となる。

大規模投資の事業では、企業家が彼らに宿舎を供給するが、それは一切の衛生設備を欠いた急造の部落であり、労働者として、また賃借人として二重に搾取することが出来る。

移動民の現状の一例としてドクター・サイモンの報告。

「大規模な鉄道工事が始まり、本市に全工事の本部が置かれた。大多数の就業者が本市に移り住むことになったが、全員を収容できず、請負人が沿線方々に仮小屋を建てた。この仮小屋は 2 室で、換気設備も排水溝もない不衛生なもので、労働者を詰め込んだ。この小屋に一医師が衛生設備を講ずるよう指摘した。請負人は、伝染病が発生したら隔離小屋を設けると約束したが、実行されなかった。

1 年前まではこの教区に発生していなかった天然痘が続発、教区にある伝染病の隔離病棟は、ずっと患者で満杯だ。約半年で天然痘死亡が 10 人で、うち 4 人は仮小屋で発生している。罹患者家族はそれをできるだけ秘密にするため正確な罹患者数はわからない」

【P264,2 行目～P266,4 行目】

炭鉱や他の鉱山労働者は、イギリスプロレタリアートのなかで高給である。

その高給を得るための対価は前に述べた ((注 132)から資本論(二)【P520、6 行目～P529、2 行目】「 1. 14 歳未満の鉱山労働禁止の議会条例要望 2. 教育の法律要望 3. 鉱山での婦人労働廃止 4. 検屍陪審官 (労災死の裁判官) 5. 運搬桶の不正 6. 労災、監督官等の不足」の項目ごとに資本家(側) 質疑、労働者応答のことかな?)  
ので住宅事情を見よう。

採掘業者は、労働者に小屋と燃料用石炭を「無償で」与えるが、それらは現物支給部分である。小屋を与えられない者は、年 4 ポンド受け取る。

鉱山地方は、鉱山従業員やその周辺に群がる手工業者、小売商人等で一大人口を急速になす。人口が密集すれば地代も高くなる。

よって鉱山業者は、坑道付近の狭い土地に従業員と家族を詰め込む小屋を建てる。新坑が近くに開かれたり、旧坑が再採掘すれば住宅密集度が増す。

住宅建設で「節欲」の資本家が置く観点は、必要ない現金支出はしない事である。

ドクター・ジュリアン・ハンターは「モンマスシャーにおける類似の地方を除けば、ノーザンバーランドとダラムの鉱山で就業している坑夫等の住宅は、イングランドにおけるこの種の大規模なものとしては、最悪で高価なものだ。最悪は、1室に詰め込まれる人数の多さ、狭い土地に多数の家、水不足、便所なし、家の上に家を乗せ何階にもするという方法。起業家は、全集落が居住しているのではなく野営しているようにしている。」

ドクター・ステイヴンズは「ダラム教区連合のほとんどの大鉱山を訪ねた。すべての鉱山で、住民の健康確保の手段が見られない。すべての坑夫が鉱山賃借者、所有者に12ヶ月契約で縛られ、彼らが不満を言ったりしたら契約更新されず解雇となる。これは、他のどんな現物支給制度の企業よりひどい！労働者は、伝染病の影響下にある家を彼の賃金の一部として受取ることを強制され、自分ではどうすることもできない。彼は事実上農奴である。

(以下の4行は重複ぽくていらぬんじゃない？添削(笑))

【P266,5行目～P267,後4行目】

世論や衛生警察と衝突しても、資本が、労働者の機能と家庭生活を拘束する諸条件を、利潤のため労働者の搾取は必要と正当化する。工場の機械装置の保護設備や、鉱山の換気、安全装置の節欲がそれである。

鉱山労働者の劣悪な住居環境も利潤追求の正当化している。ドクター・サイモン報告から「鉱山は通常賃借で採掘され、ほぼ21年と短い(?)賃借契約のため、賃借資本家は、より多くの利潤のため最低限の小屋しか建てない。仮に賃借資本家が善意で快適な住居を建てれば、地主資本家が、法外な追加地代を要求してくる。から頓挫させられる。

しかし、前述のハンター、ステイヴンズの報告のからみて救済策が必要だと思うけど、地主と賃借資本家は、より利潤追求しても、そのしわ寄せをすべて受ける労働者は無知であり、不潔な住居、腐敗した飲料水がストライキの原因にならないことを賃借資本家が知っているからである。」(サイモンさんの諦めか?)

d 恐慌が労働者階級の最高給部分に及ぼす影響

【P267,後3行目～P271,後4行目】

恐慌が、労働者階級の最高賃金層、労働者階級中の貴族に対する影響を見てみよう。

1857年から1866年の大恐慌だが、工業地帯では綿花飢饉により影響は少し抑えられたが、綿花飢饉により多額の資本を投資部門から貨幣市場の大きな拠点に迫いやったため、今恐慌は金融恐慌の性格を帯びていた。1866年5月にロンドンの巨大銀行の倒産を皮切りに無数の金融泡沫会社が倒産していった。破局に見舞われたロンドンの大事業部門の1つは、鉄船建造業であった。この事業の資本家は、好景気時に際限のない過剰生産をしたのみでなく、引続き信用取引が続くと思いい巨額の注文を受けていた。そこへ恐慌で破局。倒産。他の産業にも同様に破局。倒産が続いた。

このような中、労働者の状況を伝えるため 1867 年初頭にロンドン取材した通信員の報告を見てみよう。

「東部のポプラー、ミルウォール、グリニッジ、デットフォード、ライムハウス、キャニング・タウンの各地区では少なくとも 15,000 人の労働者が家族とともに極度の窮乏状態で、うち 3,000 人以上が熟練機械工である。高給の彼らも 6～8 ヶ月の失業で予備金を使い果たした。救貧院の入口に行くまでに飢えた群衆をかき分けて進むため苦勞した。中庭には作業場があり、舗石（道路に敷いてある石。敷石）を砕き 5 ブッシェル（体積の単位。1 ブッシェル 36.37 リットル）砕き 3 ペンスとパン配給切符をもらう。別の小さな小屋では、人がすし詰め状態で船のロープをほぐす作業をしていた。

1 つの救貧院で 7,000 人が救護を受けていたが、うち何百人かは 6～8 ヶ月前までは最高賃金の熟練労働者であった。最高賃金の労働者の中には、蓄えが底をついても質草がある限り教区に頼ることを尻込みする者もいる。彼らが教区に来たならば、人数は倍になるであろう。

救貧院を後にして失業者委員の案内で街の労働者の家を訪ねた。4 件の家を訪問し、窮乏生活実態を紹介している。

#### 【P271,後 3 行目～P275,後 6 行目】

1866 年恐慌終焉の後遺症として、トーリ党の新聞記事を見よう。「首都の一部で数千の失業者が黒色の弔旗持って集まりデモ行進はないが、十分に威圧的だった。彼らは飢え死にしそうだと訴えている。巨大な富が蓄積されているこの地区で、一方で 4 万人が飢えている。この集まりは、他の地区にも飛び火している。彼らは、餓死、悲惨な住居、職探しもできず、物乞いしてもダメなことを、苦痛の叫びを訴えている。納税義務を負っていた労働者は、その税金のために貧困に追い込まれている。

イギリスの資本家たちは、ベルギーを労働者の楽園と宣伝してる。その実態を、ベルギー統計中央委員のデユクペティオ氏著作から見てみよう。「ベルギーの標準労働者家庭の年間収支、栄養事情は、兵卒、水兵、囚人と比較して、（高い順に水兵、兵卒、囚人だ）囚人より劣っている。労働者家庭は、最も苦しい窮乏を覚悟してやり過ごしているが、生活手段の騰貴、労働の中断、些細な病気も破滅し、貧民に落ちる。これが、「労働者の楽園」である。実際「(別名) 資本家の楽園」では物価が少し変化しただけで、餓死者と犯罪の数も変化する。統計でベルギーに 465 万人いるが、資本家家族 45 万人、小中産家族 195 万人（労働者予備軍）、労働者家族 225 万人でその約半数が貧民名簿登載者（餓死予備軍）である。（1 家族 5 人）」

以上